

保育系短期大学卒業生の進路・キャリア形成と短大評価

The Life Course of Childcare College Graduates and Their Evaluation of Their Alumni Colleges

—Survey of Graduates from 8 Kyushu Colleges—

安部 恵美子・白川 佳子

The purpose of the present study was to investigate about the courses in life, careers and school evaluation among the alumni who graduated from training schools for nursery teachers. In this study, subjects were graduates who are in their 1st, 3rd, 7th year after graduation. 1291 graduates (1213 male and 78 female), who had majored childcare, the humanities and general education, technology, and domestic science, and graduated from 8 colleges in Kyushu area, answered our questionnaire. The feedback rate was 17.5%. The items of the questionnaire were 1) school entrance, school life and graduates' evaluation toward the contents of education of their college, 2) entering employment, 3) entering the next stage of education, 4) participation and needs of lifelong learning, 5) behavior and sense of values in private life, 6) overall evaluation toward their college.

The results were as follows :

First, graduates who graduated from training schools for nursery teachers were satisfied with the education of their college more than other major.

Second, they were satisfied with their job for a couple of years after graduation, and then graduates who are working as nursery teachers or preschool teachers used their knowledge that they had learned in their college days.

Third, they strongly asked for practical learning. In addition, the graduates who had received it at their college highly valued their college. However, the more the number of years after graduation proceeded, the lower their evaluation was.

These findings suggest that alumni who graduated from training schools for nursery teachers are satisfied with their college sufficiently because they found jobs related to their majors and qualifications. However, their satisfaction was lower as the number of years after graduation proceeded because they realized insufficiency of their knowledge that they had obtained at their colleges. In other words, the longer they work, the more they are in need of higher level of knowledge. It is inferred that we may have to provide them some opportunities for their learning (e.g. recurrent education) that compensate for the lack of their knowledge.

はじめに ～保育系短期大学の今～

現在、短期大学の中で最も学生数が多く（62,706人：平成17年度学校基本調査速報値）、また受験生に人気の高い学科は、保育科・幼児教育科・幼児保育科・こども学科などの名称を持つ保育（教育）系の学科である。受験生の資格志向と、不況の中でも比較的安定的な保育者需要に支えられて、近年、保育系の学科の人気は益々高まっている。

特に、短期大学の保育系学科での養成が7割近くを占める保育士職には、近年、児童を取りまく家庭や地域の環境の変化がもたらす、児童福祉サービスの需要の増大と多様化・高度化に対応するため、「専門性が高く、かつ、多様な保育サービスに対応することのできる資質の高い保育者の養成（平成13年2月保育士養成課程等検討委員会）」が、喫緊の課題とされている。これを受けて、平成14年度の『保育士養成課程の見直し』の中では、多様化する保育ニーズに対応する科目群や「実習Ⅱ・Ⅲ」「総合演習」の必修化が図られ、一方、養成校の創意工夫を可能とする教科目の大綱化が実施されるなど、養成教育の内容や方法に関する改善がなされている。この見直しによって、修業年限2年の指定保育士養成施設である短期大学（本稿では、以後保育系短期大学と呼ぶ）は、益々密度の濃い教育課程となった。

この状況の中で、保育系短期大学の多くは、これまでの保育士養成の実績をベースに、2年間という限られた期間で優秀な保育人材を育てる養成教育のあり方を模索している。しかしながら、大方の保育系短期大学では、保育士養成に加えて、幼稚園教諭（二種）養成課程を併設している。2つの資格（免許）を取得するための2年間の時間割は、まさに過密・飽和の状態にあり、養成教育を担当する現場の教員からの修業年限の不足への懸念また、学生からも、もっと学びにゆとりが欲しいなどの要望も数多く聞こえる。

さらに、近年の入学志願者の質の変化（基礎学力の低下・コミュニケーション能力の不足など）に対応した、教育方法の開発や教育内容の精選など、高等教育ユニバーサル時代の中で、短期大学教育そのものの改善も求められている状況にある。

このように見ていくと、現在の保育系短期大学は、まさに苦悩と転換の局面を迎えていると言っても過言ではないが、一方、保育系短期大学数および入学志願者は増加しており、卒業者の保育職への就職状況も良好という現実がある。志願者の減少に悩む短期大学関係者にとっては、保育系学科は救世的存在であり、短大活性化への活路を開く学科との期待感も強い。また、経済的理由で四年制大学の進学が困難な受験生にとっても、2年で国家資格の取得と卒後の就職に繋がる保育系短期大学は、学費面での魅力を持つ進学先のひとつとなっている。

新卒の保育者についても、近年、四年制大学の保育士養成校の増加に伴い、大卒者の保育職への進出は著しいものの、依然として、その8割近くを短大卒が占めており、今も保育の現場は、短大を中心とした二年制養成課程の出身者による運営がなされているのである（表1・2・3参照）。

表1 保育士養成課程卒業者の就職状況（平成15年度）

養成施設の種類（数）	全卒業者	占有率	保育所	占有率	児童福祉施設	占有率
短期大学（248校）	28,772	77.2%	13,731	77.9%	585	63.6%
四年制大学（97校）	2,678	7.2%	953	5.4%	108	11.7%
※全体計	37,253	100%	17,635	100%	920	100%

表2 保育士養成施設数の推移

	平成9年度			平成12年度			平成16年度		
	学校数	定員	占有率	学校数	定員	占有率	学校数	定員	占有率
短期大学	219	22,945	74.4%	217	22,845	72.8%	249	25,825	66.8%
四年制大学	26	2,140	6.9%	40	2,971	9.5%	96	6,518	16.9%
※全体計	333	30,855	100%	333	31,396	100%	439	38,678	100%

表3 (参考) 幼稚園新規採用者の学歴

	平成9年度		平成12年度		平成16年度	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
短期大学卒	10,041	87.1%	8,800	82.6%	9,173	80.9%
四年制大学卒	1,323	11.5%	1,660	15.6%	1,879	16.6%
※全体計	11,526	100%	10,654	100%	11,333	100%

1) データの出所：①平成17年3月『会報保育士養成』 ②学校教員調査17年度版
 ※上の3種の表では、短期大学と四年制大学を比較しているが、保育者養成校(含：幼稚園教員養成)には、短大・四年制大の他にも、大学院・専門学校・養成施設などがある。

I 研究の目的と方法

本研究の目的は、現在も多くの卒業生を保育界に送り出している保育系短期大学の教育の点検・評価にある。その方法論として、卒業生による評価を取り上げ、保育系短期大学教育を検証することにする。

筆者らはこれまでに、保育系のみならず多様な専攻分野にわたる短大卒業生に関する調査の分析を実施しているが、ここでは、卒業生の多様な活躍の実態(進路・キャリア形成)と、彼らの短大に対する意識(短大評価)を「短期大学教育の成果」と捉えている。

特に本稿では、二年制の保育士養成課程である保育系短期大学に焦点を当てて、これまでに、どんな入学生を受け入れ(Input)、どのような教育を行ない(Throughput)、どのような質の卒業生を輩出し(Output)、そして、彼らが職場や社会でどのように活躍をしているか(Outcome=「教育の成果」)、この一連のプロセスを明らかにして、保育系短期大学の教育を総合的に評価する(図1参照)。

さらに、この分析・評価の結果が示唆する保育士養成機関としての保育系短期大学教育の特徴と、そこから導き出される教育改善の方法に関する考察を加えることにする。

主な分析資料は、筆者らが平成16年1～3月に実施した、九州地区の8つの短期大学(そのうち、保育系の学科を有する短期大学は6校)の卒業後1年目・3年目・7年目の全卒業生を対象とした、質問紙・郵送回収法による卒業生調査である(表4)。

なお、本調査は、短期大学の卒業生の実態を示すものというには、全体の回収率が低すぎる(17.60%)という指摘がある。保育系だけの回収率でも18.50%であり、このため回答者の属性や回答傾向には、何らかのバイアスがかかっている可能性が高いと考えられる。

確かに、本調査結果をもって保育系短期大学の卒業生の実態というには危険があるという指摘は正しいが、卒業後1年から7年を経過した卒業生を追跡することは、想像以上に難しく、卒業時の、または、同窓会などが把握している住所に送付した調査依頼は、転居先不明による返送や、結婚や勤務先変更などのため、実家に送付したものの、依頼が本人の手に届かなかったケースも数多くあったこと

が報告されている。このことが、回収率を押し下げている大きな原因であるので、現在進行中の第二次調査では、あらかじめ住所確認を行い、その後に調査用紙を送付する方法を採用して回収率の向上に努めている。

さて、回収率を上げることで、調査の精度は当然高まるのは間違いがないが、分析に携わった、筆者らをはじめ日頃から卒業生と接している短期大学教員の間には、2割弱の回収率に留まった今回の調査結果が、卒業生全体の実態とさほどかけ離れているという印象はない。短期大学教育を高く評価する者とそうではない者の存在、また、職場環境や職歴とそれに関連する卒業生の職業意識の多様性などが見て取れる調査結果であった。われわれ教員は、それを卒業生たちの生の声として謙虚に受け止め、保育系短期大学の教育改善への方向性を探ることが、最も重要であると感じている。

また、筆者らの知る限り、こうした高等教育機関のある年度の卒業生を対象とした悉皆調査、しかも、複数の大学合同での調査事例は極めて少ない。98年に公的な機関が行なった大卒者を対象とした国際比較調査における日本の大学卒業生の回収率は、事前の住所確認はがき送付・督促礼状送付・調査票2回送付の手続きをとって、3割程度であったことを付記しておきたい。

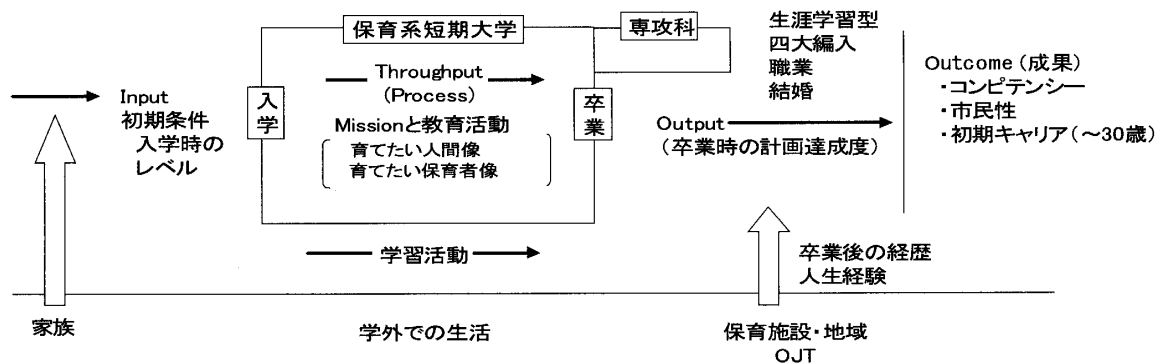


図1 分析の枠組み

表4 調査の概要

1. 調査の実施時期 2004年(平成16年)1~3月
 2. 調査の対象 九州地区8短期大学の卒業生
 3. 回収率 17.60%
- (学科構成別有効サンプル)

(実数, %)

		学 科								合 計	
		人文教養系		工 業 系		家 政 系		保 育 系			
性 別	女 性	207	17.7	50	4.4	505	44.3	383	33.6	1,140	100.0
	男 性	6	8.2	45	61.6	16	21.9	6	8.2	73	100.0
男 女 計		208	17.1	95	7.8	521	43	389	32.1	1,213	100.0

(卒業年数別有効サンプル)

		度 数	構 成 比
卒業年数	卒業1年目(平成15年卒)	455	35.2
	卒業3年目(平成13年卒)	397	30.8
	卒業7年目(平成9年卒)	439	34
合 計		1,291	100

II 短大卒業生調査にみる「保育系卒業生の進路・キャリア形成と短大評価」

表4に示す「短期大学卒業生調査」から抽出した、保育系短期大学（6短大）卒業生389人のデータをもとに、彼らの進路・キャリア形成と、短大評価に係る調査質問項目の分析結果と考察を以下に示す。

a) 入学時のプロフィール

保育系短期大学へ入学してくる学生はどのような特性をもっているのかを明らかにするために、保育系以外の学科との比較分析をしてみた。まず、最初に、高校卒業後の進路選択の際に短期大学以外の進学を考えたかどうか尋ねたところ、その他の学科では「考えなかった」と答えた者が42.4%であったのに対して、保育系では60.4%と半数以上の学生が進学先として短期大学を考えていた（表5）。短期大学を選んだ決め手となった理由としては、「四年制大学より早く社会に出られる」「経済的な理由」「希望した学校に進学できなかった」などが多くあがっており（表6）、保育系の短大に進学する学生の家庭的な経済状況や進学のための学習能力が影響しているという現状がうかがえた。また、「希望した学校に進学できなかった」と答えた割合が29.5%と多く、このような「不本意入学」であった者が2年間の学生生活の中でどのように変化するのかも後述する短大教育の効用と総合評価の中でみていきたい。

表5 短大以外の進学を考えたかどうか

	保育系	その他
(N)	(389)	(886)
1 考えなかった	60.4	42.4
2 考えた	39.3	55.9
合計	100	100

表6 他の学校よりも短期大学を選んだ決め手となった理由

	保育系	その他
(N)	(146)	(471)
1 就職に有利だと思ったから	11.0	16.1
2 四年制大学より早く社会に出られるから	17.1	12.5
3 専門学校より教養を身に付けることができるから	7.5	11.7
4 大学への編入学の制度もあったから	4.1	9.3
5 他の学校は自宅（親元）から通えないから	8.2	5.9
6 経済的な理由から	12.3	7.4
7 希望した学校に進学できなかったから	29.5	27.6
8 その他	10.3	9.3
合計	100	100

b) 短大在学中の学生生活と教育内容

保育系短大生は在学中にどのような学習をしてきたのであろうか。保育系の特徴として、「現実の課題に即した学習」が他の学科と比較して重視されていたようである（表7）。また、「専攻分野の理論や概念の学習」についても、他の学科よりも重視されており、保育者養成機関であるという性質上、他の学科に比べて専門的な学習内容が重視されていたということであろう。勉学に必要な条件の充実に関しては、保育系は他の学科よりも全体的に高い評価であったが、全項目5段階評定の3点台であった。特に評価が高かった項目は「専攻の授業内容」「授業における実学性」であり、他の学科と比較してもかなり高かった。

c) 卒業直後の進路

① 卒業直後の進路

保育系短大卒業生の進路をその他の学科の卒業生と比較してみると、卒業後すぐ就職が79.6%と最も高く、進学した者が12.4%，アルバイト・フリーターが4.6%であった（表8）。これらの割合はその他の学科の卒業生と類似しているが、保育では、その他の学科より、アルバイト・フリーターや求職活動中の割合が低い傾向がある。

表7 在学中の学習内容や方法についての重視度

	保育系	その他
a. 専攻分野の理論や概念の学習（講義での学習）	3.99	3.78
b. 現実の課題に即した学習（実習・演習等での学習）	4.17	3.82
c. 授業への出席	3.96	3.91
d. コミュニケーション能力の習得（グループワークなど）	3.53	3.31
e. 学生の教員への質問	3.16	3.06
f. 学習達成度のチェックと評価（定期試験や小テスト）	3.41	3.37
g. 卒業論文・卒業研究の作成	3.40	3.29
h. 在学中の就業体験（実習やインターンシップ）	3.80	3.07
i. 授業外で教員とコミュニケーションをもつこと	3.30	3.03
j. 専攻学科以外の科目の学習	2.77	2.80
k. 自学自習	2.67	2.69

表8 卒業直後の進路

	保育系	その他
(N)	(388)	(827)
卒業後すぐ就職	79.6	66.5
卒業後すぐ進学	12.4	14.1
アルバイト・フリーター	4.6	9.4
家事手伝い	1.3	1.7
求職活動を続けた	1.5	5.9
その他	0.5	2.3
合計	100	100

② 現在の仕事

表9には、保育系卒業生の現在の仕事の職種を示している。保育所保育士が最も多く、卒後1年目には63%であるが、7年目には36.6%にまで下がる。そして、卒後年数とともに保育士や幼稚園教諭などの割合が低下し、一般事務、介護福祉士、福祉関連職などが増えてきている。このように、保育系の専門職である保育士や幼稚園教諭などの仕事は、卒後7年目までに多くの卒業生が離職し、他の業種への移行がみられる。

次に、現在の勤務形態を、正規就業（正規の職員、自営業）、非正規就業（アルバイト・パートタイム、契約社員、家事手伝い）、進学、家事・子育て、求職中（職業訓練、無職で仕事探し）、その他に分類し、保育系短大卒業生とその他の学科卒業生と比較してみた。その結果、表10に示したように、保育系では、正規就業54.1%、非正規就業21.3%と他の学科卒業生とほぼ同様の傾向がみられた。

保育系短期大学卒業生の進路・キャリア形成と短大評価

しかしながら、保育系では専門職に就いている割合がその他の学科39.1%と比較すると81.2%とかなり高い。これらのことから、専門職についていながらも非正規就業という勤務形態が多いことが保育系卒業生の特徴となっていることがわかる。

さらに、現在の仕事にふさわしい学歴を尋ねたところ、専門職では短大卒と答える割合が77.9%と高く、次に大学卒12.0%であった。一方、事務職では大学卒、高校卒、専門学校卒それぞれの割合が専門職よりも高く回答が分散しているため、短大卒と答える割合が35.3%とあまり高くなかった（表11）。

d) 短大教育と職業キャリアの関連

短大教育は卒業生たちの仕事に、どの程度役立っているのか。保育系卒業生では短大で獲得した知識や技能を頻繁に使っていると高評価をした者が66.9%もあり、その他の学科の47.7%と比較しても

表9 現在の仕事の職種（保育系のみ）

	1年目	3年目	7年目	合計
(N)	(138)	(106)	(112)	(356)
1 教員（幼稚園・学校）	23.9	15.1	17.9	19.4
2 保育士（保育所など）	63.0	66.0	36.6	55.6
3 栄養士・管理栄養士	0.7	0.9	0.0	0.6
4 医療技術者（技師，療法士，衛生士など）	0.7	1.9	1.8	1.4
7 その他の専門的技術職業	2.2	0.0	3.6	2.0
8 事務（一般，経理，人事など）	1.4	5.7	13.4	6.5
9 事務（受付，窓口業務，秘書）	1.4	1.9	2.7	2.0
10 事務（医療事務・医療秘書）	0.7	0.0	4.5	1.7
11 事務（情報関係のOAインストラクター）	0.0	0.0	0.9	0.3
12 販売の職業（店頭，実演など）	0.7	1.9	3.6	2.0
16 個人サービスの仕事（接客，旅客業務など）	1.4	2.8	2.7	2.2
18 生産工程・労務作業	0.7	0.0	0.0	0.3
19 その他	0.0	0.0	0.9	0.3
20 介護福祉士	0.0	1.9	5.4	2.2
21 福祉関連職	2.9	0.0	5.4	2.8
27 警備・保安職	0.0	0.0	0.9	0.3
28 郵政職	0.0	0.9	0.0	0.3
30 研究関連職	0.0	0.9	0.0	0.3
合計	100	100	100	100

表10 現在の勤務形態

	保育系	その他
(N)	(381)	(814)
正規就業	54.1	54.7
非正規就業	21.3	23.0
進学	5.0	5.0
家事・子育て	8.9	8.2
求職中	1.8	3.6
その他	8.9	5.5
合計	100.0	100.0

高い評価を得ている。卒年別にみても、保育系全体では、その知識や技能の使用度は卒業後の年数が経過するに従って低下しているが、専門職に就いている保育系卒業生は、卒業後年数が経っても短大で獲得した知識や技能を活用していた（表12）。

しかしながら、具体的に短大で身に付けた能力と仕事で必要とされる能力を比較した際に、5段階評定で1以上の不足があった項目が多数あり、特に「ひとりで仕事をこなせる能力」については短大教育だけでは能力不足を感じているようである（表13）。卒後年数で分析してみたが、外国語やコンピュータにおいて、能力の不足感が高まる傾向がみられたが、全体的にどの卒業年次も現在の自分の能力では不足を感じているようであった。このように、短大で学んだ知識や技能を卒後7年目に活用できていながらも、保育現場で必要とされる能力には不足感を感じているという現状について、我々、保育者養成校の教員は認識をし、卒業生が不足感を感じている知識技能についてリカレント教育などを通じて補っていく必要があると考えられる。

表11 仕事にふさわしいと思われる学歴（保育系のみ）

	大学院 博士卒	大学院 修士卒	大 学 学部卒	短大卒	専 門 学校卒	高校卒	その他	合 計	(N)
専門職	0.5	0.9	12.0	77.9	5.5	0.0	3.2	100	(217)
事務職	0.0	0.0	17.6	35.3	14.7	17.6	14.7	100	(34)
その他	0.0	0.0	19.0	23.8	14.3	28.6	14.3	100	(21)

表12 現在の仕事における短大で獲得した知識や技能の使用度

	1年目	3年目	7年目	全 体	(N)
保育系全体	74.5	74.2	45.8	66.9	(275)
保育系専門職	81.0	83.3	78.5	81.3	(220)
その他の学科	47.9	47.5	47.5	44.7	(651)

注) 表中の数値は、5件評定の上位2件の比率(%)を示す。

表13 短大で身に付けた能力と仕事で必要とされる能力の差異

	保 育 系			そ の 他
	(A) 短大で身に付 けていた能力	(B) 仕事で必要と される能力	(A) - (B) 差異得点	(A) - (B) 差異得点
f. ひとりで仕事をこなせる力	3.03	4.29	-1.26	-1.23
k. 話しことばによるコミュニケーション能力	3.33	4.56	-1.24	-1.15
e. 問題解決能力	2.94	4.14	-1.20	-1.10
h. 仕事への適応能力	3.27	4.46	-1.19	-1.22
n. 礼儀, マナー	3.55	4.68	-1.14	-1.02
g. チームの中で仕事を遂行する能力	3.31	4.43	-1.13	-1.02
m. 人との交渉能力, 折衝能力	3.00	4.12	-1.13	-1.02
j. 自発性, 自主性	3.31	4.34	-1.03	-0.89
l. リーダーシップを発揮できる力量	2.89	3.83	-0.94	-0.78
i. 創造性	3.29	4.23	-0.94	-0.56
a. 幅広い知識・教養	3.26	4.19	-0.94	-0.79
b. 専門的な知識や技能	3.50	4.23	-0.73	-0.58
d. コンピュータを使いこなす技能	2.31	2.74	-0.43	-0.49
c. 外国語の能力	1.82	1.78	0.05	0.09

e) 短大教育の効用と総合評価

保育系短大に入学してくる者の約60%が進路選択の際に短大以外を考えていないものの、その理由には、学力不足から希望する学校に入学できない、また、経済的な状況で2年間の教育を選択するという、「不本意入学」とも取れる志望動機で保育系短大に入学しているという現状があることを前項で述べた。では、2年間の短大教育を通して、卒業生は短期大学をどのように評価しているのでしょうか。ここでは、「短期大学の教育がどのような側面で役に立っているか」という短大教育の有用性に関する4項目および、「もし今18歳で高卒後の進路選択ができるとしたら」という仮定法の問いによる総合評価をみていく。4項目の有用性評価は、全てにおいて保育系卒業生が他の学科の卒業生よりも高い評価であった。特に、保育系の1年目の卒業生では、「満足のいく仕事を見つける(81.0%)」「人格の発達の上で(73.0%)」とかなり高い有用性を感じていることがわかる(表14)。入学当初、不本意入学であった者も、2年間の短大教育を通して、短大で学んだ知識技能を生かせる専門職に就くことによって、短大教育に対する高評価に変わっていったと考えられる。しかしながら、卒年別にみたら、保育系は他の学科よりも評価が高いものの、卒後年数を経るにしたがって有用性が低下している。このことは、ここ数年の間に短期大学教育の教養的・職業的レリバンスが高まってきたからという可能性はあるにせよ、短大教育の有用性の限界を示唆していると考えられる。

また、短大を選ぶ可能性については、保育系がその他の学科よりも高い結果となったが、その可能性は年数を経るほどに減少している。このことは、同じ短大・同じ専攻分野を再び選択する可能性、つまり短大への回帰性が、卒業間もない卒業生には強いが年数を経るにしたがって薄れていくことを意味している。保育系卒業生の評価では、特に7年目の落ち込みが顕著である。これらのことから、短大で取得した免許・資格が生かせる職場に就職したものの、職場での長期的キャリアへの展望が見込めないことを感じているのではないかと考えられる。

表14 短大教育の効用と総合評価

		保育系			その他		
		1年目	3年目	7年目	1年目	3年目	7年目
短期大学教育が役に立ったか	a. 満足のいく仕事を見つける上で	81.0	72.3	62.5	47.4	45.0	45.7
	b. 長期的なキャリアを展望する上で	55.2	45.5	41.1	38.0	37.0	30.6
	c. 充実した家庭生活を送る上で	58.3	51.8	52.7	45.5	46.9	44.1
	d. 人格の発達の上で	73.0	68.8	57.1	56.9	53.7	50.0
もし18歳でもう一度進路選択するとすれば	A. 短大に行く	75.0	74.8	63.5	58.2	56.6	49.3
	a. 同じ短大に行く	66.2	60.4	48.0	51.5	48.0	35.5
	b. 同じ専門分野を選ぶ	74.7	68.3	64.4	52.5	51.4	46.5

注) 表中の数値は、5件評定の上位2件の比率(%)を示す。

III 教育成果(アウトカム)の規定要因

ここでは、保育系短期大学の「教育の成果」の構造や規定要因の負荷量を明らかにして、II章で述べた保育系短大卒業生の多様な実態と短大に対する意識をさらに詳しく分析する。

分析対象は教育成果の規定要因と推測される¹⁾

1. 短大時に獲得した能力(職業的コンピテンシー)の活用

2. 短大時の勉学条件

3. 卒後の職業意識

以上の3つに関する質問項目である。

1. 職業的コンピテンシーと短大教育の活用

職業生活に適合し、業績をあげるための人的資本にかかる要素は、知識・技術・能力・態度などさまざまなものがある。近年、経営学や教育学において、この総体を「コンピテンシー」として位置づける考え方が広がっている。この職業的コンピテンシーの構成要素は、いくつかのレベルで考えることができる。すなわち、人格や態度など、より職業生活全般の基礎となるもの、この上に、学校教育を通して獲得される専門性をもった知識・技術が加わり、また、より個別的な職業実務に関わる知識・技術などがある²⁾。

本調査項目には、先行研究を参考に、短期大学卒業生一般に必要と考えられる職業的コンピテンシー要素14項目を設定しているが、ここでは、この14項目の要素を元に、保育系短期大学で卒業時までに獲得したコンピテンシーと、卒業後の職場で必要とされるコンピテンシーの構造の検討をしてみよう。

因子分析の結果、獲得度・必要度は、各々、3因子構造を持っていた(表15・16)。なお、獲得度と必要度の因子構造は異なっている。

獲得度に係る3因子には「職業的能力」「人間関係力」「教養・スキル」、また、必要度に係る3因子には「職業的能力」「短大教育の知識や技術」「実務能力」とそれぞれ名付けた。

獲得した能力に関する因子構造として、職業適応に係る基礎的なコンピテンシー項目群と、人との関係の中で、特に必要と考えられるコンピテンシー項目群に括られるのは、保育系短大の教育課程の特徴(保育に関する専門的知識や技術を身につけることと、子ども、保護者や職場の仲間等とのコミュニケーション能力を育成するという2つの目的)が反映しているのではないかと、また、「コンピュータを使いこなす能力」「外国語の能力」と「幅広い知識・教養」がひとつの因子に包含されているのは、養成課程で学ぶ一般教養的基礎科目として、保育の専門科目とは異なるこれら3つの項目(科目)を学んだという認識を有しているからであると推測できる。

これに対し、職場で必要な能力については、短大卒業生全体のものと同様の因子構造となっている³⁾。

獲得したコンピテンシー3因子と必要とされるコンピテンシー3因子について、卒年別に比較したものが表17である。ここでは、短大卒業時までに獲得した能力で、「人間関係力」「教養・スキル」については、卒業後の年数を経るごとに評価が低下している。これは、自己評価が現実の必要と照らし合わせてより厳しくなっている側面と、短大教育が改善されてきたことによって近年の卒業生の評価が高くなった側面とが相乗したものであると考えられる。「人間関係力」については、1年目でプラスであるのに対して、3年目には評価がマイナスに転じ、むしろ自己評価が厳しくなっている。つまり卒業時に獲得していたかと思っていたけれども、卒業後の年数を経てそう思えなくなった面が強いと思われる。

他方、仕事での必要性について、実務的なスキルは、卒業後の年数を経るごとに重要性が増しており、「短大教育の知識・技術」の重要性が低下しているのとは、ちょうど逆の傾向にあるのは興味深い。

2. 教育内容と勉学条件に対する評価の構造

第二に、卒業生の教育内容・方法や勉学条件に対する評価を通して、保育系短期大学の教育状況を明らかにし、更に卒業生たちの回答結果からそれら評価の構造を整理した上で、教育の内容・方法・条件と総合的なアウトカムに対する評価との関連を考察する。

まず、重視されていた学習内容では2つの因子が抽出された(表18)。まず第1因子は、「専攻科目以外での学習」「授業以外でのコミュニケーション」「自学自習」「教員への質問」など、幅広い学習や学習への自発的なコミットメントに関する項目で構成されているため「幅広い学習」、第2因子は、

表15 卒業時まで獲得した能力因子分析結果(主成分分析・バリマックス回転)

	職業的能力	人間関係力	教養・スキル	共通性
h. 仕事への適応能力	0.795	0.269	-0.036	0.706
f. ひとりで仕事をこなせる力	0.766	0.318	0.020	0.688
g. チームの中で仕事を遂行する能力	0.598	0.498	0.080	0.611
b. 専門的な知識や技能	0.583	-0.051	0.527	0.620
j. 自発性, 自主性	0.542	0.599	0.052	0.656
e. 問題解決能力	0.538	0.349	0.250	0.473
i. 創造性	0.510	0.447	0.173	0.490
k. 話しことばによるコミュニケーション能力	0.257	0.793	0.114	0.708
m. 人との交渉能力, 折衝能力	0.234	0.770	0.027	0.648
n. 礼儀, マナー	0.078	0.671	0.275	0.532
l. リーダーシップを発揮できる力量	0.339	0.599	-0.030	0.474
d. コンピュータを使いこなす技能	0.071	0.050	0.776	0.610
c. 外国語の能力	-0.060	0.149	0.753	0.593
a. 幅広い知識・教養	0.470	0.160	0.539	0.537
因子寄与	3.229	3.185	1.932	8.346
因子寄与率	23.1%	22.7%	13.8%	59.6%

表16 仕事で必要とされる能力因子分析結果(主成分分析・バリマックス回転)

	職業的能力	短大教育の知識技術	実務能力	共通性
h. 仕事への適応能力	0.769	0.262	-0.073	0.666
f. ひとりで仕事をこなせる力	0.754	0.019	-0.085	0.576
m. 人との交渉能力, 折衝能力	0.684	0.149	0.173	0.520
g. チームの中で仕事を遂行する能力	0.679	0.332	-0.032	0.572
l. リーダーシップを発揮できる力量	0.673	0.202	0.099	0.504
j. 自発性, 自主性	0.667	0.418	0.025	0.621
e. 問題解決能力	0.642	0.034	0.165	0.440
i. 創造性	0.545	0.561	0.010	0.612
k. 話しことばによるコミュニケーション能力	0.523	0.456	0.154	0.504
n. 礼儀, マナー	0.461	0.394	0.185	0.402
a. 幅広い知識・教養	0.120	0.810	0.035	0.671
b. 専門的な知識や技能	0.190	0.806	-0.173	0.715
c. 外国語の能力	0.038	0.152	0.752	0.590
d. コンピュータを使いこなす技能	0.094	-0.222	0.775	0.658
因子寄与	3.229	3.185	1.932	8.346
因子寄与率	23.1%	22.7%	13.8%	59.6%

「専攻分野の理論や概念の学習」「現実の課題に即した学習」「在学中の就業体験」「コミュニケーション能力の習得」といった、保育者養成に係る授業内容に関する項目で構成されているため、「授業内学習」と名付けた

さらに、勉学条件の充実度については3つの因子が抽出された(表19)。第1の因子は、「選択できる授業の多様性」「学科カリキュラムの体系性」「専攻の授業内容」「試験や成績評価の方法」といった、正課に関する項目で主に構成されている。一方、第2の因子は「図書館の施設や蔵書」「パソコンや各種の実験器具」「教材やテキスト」、第3因子は「授業以外で教員と接触する機会」「学生同士が交流する機会や場」「就職指導の組織や実習機会」「短期大学の意志決定に学生が参加できる可能性」などといった、正課内容以外の項目で構成されている。

よって、第1因子は「正課内容」、第2因子は「施設・設備」、そして、第3因子は「正課以外のソフト面」と名付けた。

重視度および充実度に対する卒業生の評価を卒年別に見ていくと、卒業後1年目の評価は高いが、卒業後の年数を経るごとに、重視されていない・充実していないとの厳しい評価となる(表20)。その理由として、ここ6年間の間に、教育内容や学生のサポート体制の改善、また施設設備のハード面で

表17

(上段は平均値, 下段は標準偏差)

	短大卒業時まで獲得した能力			現在仕事で必要とされる能力				
	職業的能力	人間関係力	教養・スキル	職業的能力	短大教育の知識技術	実務能力		
卒業後の年数	卒業後1年目 (n=106)	-0.058 <i>0.935</i>	0.174 <i>1.003</i>	0.240 <i>1.013</i>	卒業後1年目 (n=158)	0.004 <i>0.920</i>	0.179 <i>0.896</i>	-0.244 <i>0.820</i>
	卒業後3年目 (n=87)	0.015 <i>1.098</i>	-0.114 <i>1.016</i>	-0.052 <i>0.942</i>	卒業後3年目 (n=107)	0.112 <i>0.945</i>	-0.006 <i>0.919</i>	0.077 <i>1.050</i>
	卒業後7年目 (n=70)	0.070 <i>0.976</i>	-0.121 <i>0.949</i>	-0.299 <i>0.974</i>	卒業後7年目 (n=108)	-0.148 <i>1.165</i>	-0.260 <i>1.187</i>	0.269 <i>1.105</i>

表18 重視されていた学習内容因子分析結果(主成分分析・バリマックス回転)

	幅広い学習	授業内学習	共通性
j. 専攻学科以外の科目の学習	0.803	0.007	0.645
k. 自学自習	0.782	0.068	0.616
e. 学生の教員への質問	0.654	0.362	0.558
g. 卒業論文・卒業研究の作成	0.616	0.192	0.416
i. 授業外で教員とコミュニケーションをもつこと	0.616	0.241	0.438
f. 学習達成度のチェックと評価(定期試験や小テスト)	0.536	0.374	0.427
a. 専攻分野の理論や概念の学習(講義での学習)	0.074	0.728	0.536
b. 現実の課題に即した学習(実習・演習等での学習)	0.061	0.796	0.637
h. 在学中の就業体験(実習やインターンシップ)	0.197	0.575	0.370
d. コミュニケーション能力の習得(グループワークなど)	0.426	0.518	0.450
c. 授業への出席	0.203	0.489	0.281
因子寄与率	3.000 27.3%	2.374 21.6%	5.374 49.9%

保育系短期大学卒業生の進路・キャリア形成と短大評価

の整備が進んできたことと、卒業生たちが様々な社会経験を経ることで、短大教育に対する評価の目が厳しくなっていること、この2つの側面が考えられるであろう。

つぎに、短期大学教育の内容・方法・条件と短期大学のアウトカム評価の関連性について考察する(表21)。

まず「授業内学習の重視」「正課内容の充実」「正課内容以外のソフト面の充実」の4項目において、職業やキャリアに対する評価のみならず、「充実した家庭生活」「人格発達」を含めたすべての短期大学のアウトカム評価に対して有意な正の相関が認められた。

次に高等教育諸機関の回帰(選択)可能性との関係は、「同じ短大に行く」に対しては全項目で有意な正の相関が認められる。やはり、教育のすべての側面において評価が高い短大出身の学生ほど出

表19 勉学条件の充実度因子分析結果(主成分分析・バリマックス回転)

	正課内容	施設設備	正課以外のソフト面	共通性
d. 選択できる授業の多様性(多さ)	0.793	0.181	0.128	0.678
e. 学科カリキュラムの体系性(全体的なまとまり)	0.771	0.233	0.168	0.677
c. 専攻の授業内容	0.725	0.107	0.295	0.624
g. 授業やコースを選択する自由	0.711	0.198	0.139	0.563
f. 試験や成績評価の方法	0.694	0.244	0.229	0.594
i. 授業方法の工夫	0.684	0.233	0.337	0.636
a. 勉学全般に関する指導体制	0.628	0.287	0.261	0.544
h. 授業における実学性(実践で役立つ授業)の重視	0.592	0.141	0.489	0.609
b. 卒業論文・卒業研究への指導・助言	0.477	0.288	0.094	0.319
n. 図書館の施設や蔵書	0.161	0.845	0.216	0.786
p. パソコンや各種の実験器具	0.276	0.753	0.212	0.688
o. 教材やテキスト	0.355	0.725	0.144	0.672
k. 授業以外で教員と接触する機会	0.137	0.141	0.861	0.780
l. 学生同士が交流する機会や場	0.249	0.352	0.679	0.647
j. 就職指導の組織や実習機会	0.355	0.152	0.660	0.585
m. 短期大学の意志決定に学生が参加できる可能性	0.263	0.515	0.519	0.603
因子寄与	4.680	2.674	2.653	10.007
因子寄与率	29.3%	16.7%	16.6%	62.5%

表20

(上段は平均値, 下段は標準偏差)

		重視された授業内容		勉学条件の充実度		
		幅広い学習	授業内学習	正課内容	施設設備	正課以外のソフト面
卒業後の年数	卒後1年目 (n=160)	0.066 <i>1.004</i>	0.110 <i>0.949</i>	0.059 <i>1.050</i>	0.159 <i>1.003</i>	0.195 <i>0.965</i>
	卒後3年目 (n=107)	-0.019 <i>1.075</i>	0.064 <i>1.039</i>	0.018 <i>1.055</i>	-0.026 <i>1.031</i>	-0.039 <i>0.958</i>
	卒後7年目 (n=106)	-0.081 <i>0.914</i>	-0.231 <i>1.006</i>	-0.103 <i>0.861</i>	-0.206 <i>0.930</i>	-0.246 <i>1.040</i>

表21 短期大学教育内容・方法・勉学条件とアウトカム評価

	幅広い学習 の重視	授業内学習 の重視	正課内容の 充実	施設設備の 充実	正課以外の ソフト面の 充実
機能面から見た短大のアウトカム					
a. 満足のいく仕事を見つける上で	0.068	0.357**	0.374**	0.070	0.205**
b. 長期的なキャリアを展望する上で	0.170**	0.364**	0.348**	0.094	0.209**
c. 充実した家庭生活を送る上で	0.185**	0.387**	0.340**	0.187**	0.169**
d. 人格の発達の上で	0.199**	0.400**	0.351**	0.143**	0.293**
他高等教育機関との比較で見た短大のアウトカム					
A. 短大に行く	0.180**	0.201**	0.113*	0.176**	0.139**
a. 同じ短大に行く	0.181**	0.254**	0.193**	0.186**	0.242**
b. 同じ専門分野を選ぶ	0.029	0.165**	0.075	0.074	0.153**
B. 四年制大学に行く	-0.003	-0.058	-0.090	-0.096	-0.015
C. 専門学校に行く	0.095	0.026	-0.020	0.046	-0.001
D. 進学しない	-0.055	-0.005	-0.020	-0.061	-0.007

**p<.01 *p<.05

身短大回帰可能性が高い傾向にある。

また、「同じ専門分野を選ぶ」に対しては、「授業内学習の重視」と「正課内容以外のソフト面充実」つまり授業以外での進路指導や教員との交流の場などが充実していたかどうか、有意な正の相関が認められた。

さらに、短大全卒業生に対する分析では「四年制大学に行く」「専門学校に行く」に対して、負の相関が見られた項目があったが⁴⁾ 保育系短大卒業生の分析結果には、有意な負の相関が認められなかった。このことはすなわち、教育条件に対する満足度の高さは短大への回帰性を高めるものの、逆に満足度の低さは、短大不選択の直接理由にはなりにくいことを意味している。

3. 職業観と職業生活における満足度

第三に、卒業生の職業観、職業生活の充実度・満足度に関する17の質問項目の因子分析を行い卒業生の職業志向性の構造を整理したい。

その結果、職業に関して重視する内容に「私生活重視」「専門性重視」「将来性重視」「現実面重視」と各々名付けた4因子、また、職業の満足の程度に「キャリア満足」「私生活満足」「安定面満足」と名付ける3因子が抽出された(表22)。

これら計7因子に関する因子得点の平均を卒年次別に見たものが、表23であるが、卒年次の新しい卒業生ほど、私生活や職場の雰囲気などの職場の現実面を重視する傾向が強く、逆に専門性の重視は、7年目の卒業生が最も高い。また、満足度は3年目の卒業生が最も低いことが分かった。就職して間もない時期には、仕事に対するモチベーションはそれほど高くはなく、安定した雇用環境と人間関係の良好な職場を求めているが、年数を経ると、キャリア形成(働きがい)や、将来性を重視する傾向が見える。

一方、仕事への満足度は、卒後1年目の卒業生は、仕事内容にも待遇にも満足をしているが、3年目の満足度は一気に低下している(表24)。しかし、7年目には、私生活に関する満足度と職業の安定性への満足度が向上している。この結果は、私生活を充実させる時間的なゆとりを持ち、安定した雇

保育系短期大学卒業生の進路・キャリア形成と短大評価

用条件を有する卒業生のみが就業を継続している状況を物語っていると解釈することもできよう。

さて、仕事に関する志向性（何を重視するか）・満足度と短期大学のアウトカム評価の間には、関連性が見られる（表25）。保育系短大教育が全般的に役に立ったと感じる人は、仕事での専門性と現実

表22 仕事で重視すること（主成分分析・バリマックス回転）

	私生活重視	専門性重視	将来性重視	現実面重視	共通性
q. 通勤の利便性	0.710	0.159	-0.011	0.092	0.537
m. 余暇に費す時間的ゆとりがあること	0.674	0.009	0.102	0.257	0.531
p. 男女差別が少ない	0.609	0.316	0.176	-0.101	0.512
o. 仕事と家事の両立	0.607	0.387	0.179	-0.258	0.617
h. 雇用と身分の保障	0.596	-0.035	0.475	0.210	0.626
g. 高い収入	0.548	-0.111	0.545	0.169	0.638
c. 学習を続け深める機会	0.036	0.775	0.105	0.147	0.634
d. チャレンジングな仕事であること	0.028	0.746	0.167	0.162	0.611
b. 自分のもつ知識・技能を活かす機会	0.233	0.656	0.157	0.060	0.513
n. 仕事でさまざまな経験ができること	0.380	0.518	-0.073	0.359	0.546
e. 職務の内容や範囲の明確さ	0.283	0.375	0.343	0.277	0.415
i. 将来のキャリアの見通しがあること	0.140	0.132	0.733	0.137	0.593
f. 社会的評価・ステータス	0.056	0.255	0.662	0.101	0.517
a. 仕事の自立性（仕事に決定権がある）	0.068	0.518	0.541	0.028	0.566
j. チームの中で仕事をする機会	0.000	0.244	0.336	0.670	0.621
k. 社会に役立つ仕事をする機会	0.033	0.427	0.217	0.646	0.647
l. 職場の雰囲気よさ	0.527	-0.015	0.009	0.643	0.692
寄与率	2.940 17.30%	2.877 16.90%	2.211 13.00%	1.789 10.50%	9.817 57.70%

表23 仕事の満足度

	キャリア満足	私生活満足	安定面満足	共通性
d. チャレンジングな仕事であること	0.786	0.126	0.026	0.635
b. 自分のもつ知識・技能を活かす機会	0.743	-0.013	0.216	0.599
c. 学習を続け深める機会	0.735	0.106	0.123	0.567
j. チームの中で仕事をする機会	0.671	0.119	0.278	0.541
k. 社会に役立つ仕事をする機会	0.625	0.173	0.326	0.527
e. 職務の内容や範囲の明確さ	0.611	0.341	0.110	0.502
a. 仕事の自立性（仕事に決定権がある）	0.585	0.232	0.161	0.422
n. 仕事でさまざまな経験ができること	0.550	0.389	0.158	0.478
l. 職場の雰囲気よさ	0.530	0.498	-0.020	0.529
f. 社会的評価・ステータス	0.518	0.161	0.350	0.417
m. 余暇に費す時間的ゆとりがあること	0.098	0.849	0.014	0.731
o. 仕事と家事の両立	0.073	0.810	0.172	0.691
p. 男女差別が少ない	0.249	0.504	0.414	0.488
q. 通勤の利便性	0.200	0.433	0.134	0.245
g. 高い収入	0.064	0.143	0.793	0.653
h. 雇用と身分の保障	0.205	0.193	0.747	0.637
i. 将来のキャリアの見通しがあること	0.328	0.011	0.725	0.633
寄与率	4.389 25.80%	2.544 15.00%	2.363 13.90%	9.296 54.70%

表24

(上段は平均値, 下段は標準偏差)

		仕事で重視すること				仕事の満足度		
		私生活重視	専門性重視	将来性重視	現実面重視	キャリア満足	私生活満足	安定面満足
卒業後の年数	卒業後1年目 (n=142)	0.037 <i>0.994</i>	-0.036 <i>0.966</i>	-0.083 <i>0.961</i>	0.130 <i>0.795</i>	0.041 <i>1.049</i>	-0.006 <i>0.930</i>	0.022 <i>1.004</i>
	卒業後3年目 (n=105)	-0.008 <i>1.000</i>	-0.082 <i>1.033</i>	0.158 <i>1.000</i>	0.104 <i>1.032</i>	-0.024 <i>1.001</i>	-0.130 <i>1.014</i>	-0.021 <i>1.003</i>
	卒業後7年目 (n=107)	-0.042 <i>1.015</i>	0.129 <i>1.009</i>	-0.046 <i>1.042</i>	-0.274 <i>1.155</i>	-0.034 <i>0.932</i>	0.163 <i>1.075</i>	-0.009 <i>1.005</i>

表25 仕事の重視度・満足度とアウトカム評価

	私生活重視	専門性重視	将来性重視	現実面重視	キャリア満足	私生活満足	安定面満足
機能面から見た短大のアウトカム							
a. 満足のいく仕事を見つける上で	0.020	0.110**	-0.22**	0.174**	0.341**	0.024	0.217**
b. 長期的なキャリアを展望する上で	-0.006	0.129*	0.022	0.084	0.307**	0.042	0.152*
c. 充実した家庭生活を送る上で	0.029	0.181**	-0.018	0.110*	0.179**	0.238**	0.153*
d. 人格の発達の上で	-0.002	0.091	-0.084	0.131*	0.172**	0.163**	0.163**
他高等教育機関との比較で見た短大のアウトカム							
A. 短大に行く	0.030	-0.063	-0.040	0.170**	0.088	0.079	0.114
a. 同じ短大に行く	-0.003	0.068	-0.039	0.151**	0.187**	0.021	0.132*
b. 同じ専門分野を選ぶ	-0.016	0.101	-0.061	0.087	0.107	0.061	0.118
B. 四年制大学に行く	0.001	0.029	0.110	-0.035	-0.24**	-0.067	-0.006
C. 専門学校に行く	-0.040	0.002	0.173**	-0.084	-0.128	-0.049	-0.129
D. 進学しない	-0.015	-0.102	-0.006	0.061	-0.098	0.016	-0.14**

**p<.01 *p<.05

面（職場の雰囲気や人間関係）を重視する傾向が強く、また、今の仕事の内容（キャリア）と雇用条件（安定面）に満足している人も、短大教育を高く評価する傾向にある。

また、キャリア形成に対する満足度が高ければ、母校への回帰性（同じ短大に行く）が高まり、四年制大学志向は低下する。逆にキャリア満足が低い場合には、四年制大学志向が強まることも確認された。

さらに、仕事の将来性を重視する人は専門学校志向が高いことや、雇用条件（安定面）に対する満足度と進学しないという選択には負の相関、すなわち、不安定な雇用環境にある人は、短大に進学したことに対する懐疑があることも分かった。

IV ま と め

まとめと今後の課題

本研究では、保育系短大の教育の成果を検証するため、保育系だけでなく、他の専攻の卒業生との

比較を通して、卒業後1年目、3年目、7年目を時系列で分析した。全体的な結果と考察の要約は以下の通りである。

- 1) 保育系短大生の入学時の志望動機は、家庭の経済的事情や学生本人の学力的問題から、短大以外の進学は考えなかったとする者が約6割で、これらは積極的入学ではなく不本意入学であった。
- 2) 保育系短大生は他の学科に比べて、在学中の学習内容や方法について重要視されていたという評価が高い。
- 3) 保育系短大卒業生は卒業後すぐ就職する者が他の学科と比較して高く、現在の仕事の中では7割以上が保育士や幼稚園教諭など保育の専門職についていた。そして、専門職についている者は、自分の職業にふさわしい学歴を短大卒であると認識しており、キャリア満足度と勤務条件に満足している卒業生ほど母校の評価が高かった。
- 4) 短大在学中に学んだ知識技能は「職業的能力」「人間関係力」「教養・スキル」因子であり、現在の仕事で必要とされる能力は「職業的能力」「短大教育の知識技術」「実務能力」因子であった。
- 5) 保育系の卒業生は、他の専攻分野の卒業生と比較すると、短大教育に対する満足度が突出して高いが、卒年数を経るほどに、短大教育に対する評価が低下している。つまり、短大で身に付けた能力だけでは仕事で求められる能力に不足感や『キャリアの頭打ち』を感じるようになる。

さて、筆者らは、これまで多くの卒業生を保育の現場に送り出している保育系短期大学教育の「Input→Throughput→Output→Outcome」を、卒業生調査によって明らかにすることを試み、特に教育成果に関する保育系短期大学の特徴に関する考察をおこなった。

第一の特徴は、卒業時の彼らは短期大学の教育を積極的に評価して、18歳に戻れたら再び短期大学に入学すると考えているということである。そして短大で受けた教育の内容や方法にも満足している。他の分野の短大卒業生や四年制大学卒業生との比較においても、短大教育が「役に立った」との認識が強い。この背景には、卒業後の就職や進学先が短大での学びと直結していることがある。2年の養成課程を終えて保育職に就いた多くの卒業生たちは職場に必要な能力を短期大学で十分に獲得したとの自信はないが、短期大学で獲得した知識や技術は現在の仕事で必要と感じ、それを使う仕事に従事している。

そして第二の特徴として、卒後3年を過ぎ、そろそろ職場の矛盾や限界が見え始めた頃になると、短大教育の不足感を感じ、短大に対する評価が厳しくなる傾向が見える。そして、卒業直後に就いた職場に勤続している割合が3割となる7年目には、短大教育の有用性についての懐疑が最も強くなっている。

「キャリアの頭打ち」に直面する卒業生たちの姿は、保育の職場にはキャリア形成のためのOJT教育（事業所内での研修）体制が機能していないことを物語っている。保育職は回転が早く、卒業後3～4年を経過すると初職を辞めた卒業生が増えることは多くの教員が知るところである。保育所や幼稚園、そして福祉施設は小規模ゆえに、給与・福利厚生で不安定な事業所が多く、勤務を継続しづらい状況に置かれている卒業生は多い。保育職の専門性確立への道のりは、まだまだ険しいのである。

そのために短期大学ができることは、リカレント教育ではないだろうか。養成教育は、短期大学だけでは完結しない。保育者は子どもたちに育てられるという。現場経験が保育職としての専門性を高

めるならば、経験を振り返り、整理し、検証する場を卒業生たちに提供するべきであろう。

最後に、筆者らが今回実施した卒業生調査に関して、その限界と今後の展望を記したい。

本研究で使用した調査データは、特定の地域の保育系短大卒業生をサンプル（6短大）としたものであり、しかも回収率は2割弱であったが、集計結果からは保育系短期大学卒業生の実態に関する情報はかなり掴むことができた。また、これまでほとんど実施されることのなかった、養成校（保育系短大）サイドによる教育成果の検証を目的とした調査であった。この2点において実施の意味があったものの、今後、保育系短大の全体的な傾向を分析するには、地域の拡大とサンプル数の追加が当然必要であり、第2章で述べた回収率向上の方策もとらなくてはならない

また、質問紙調査だけではなく、卒業生インタビューや、就職・進学先などへの聞き取り調査などを実施する必要がある。現在、それらを包含した「短期大学卒業生二次調査」を継続中である。加えて、既存の四年制大学卒業生との比較にも着手している。

また、保育者養成課程の教育内容・方法や、卒後の進路・キャリア形成には、特殊性があるので、保育系短大卒業生対象に構成された、独自の調査項目の開発も喫緊の課題であろう。

付 記

本研究は、平成16～18年度科学研究費補助金 基盤研究B（1）「短期大学卒業生のキャリア形成に関するファーストステージ論的研究」の助成を受けて行なったものである。

注

- 1) 短期大学基準協会2005 『短期大学卒業生の進路・キャリアと短大評価最終報告書』 第10章94p
- 3) 同書 第2章31P
- 4) 同書 第8章80P
- 2) コンピテンシーの概念や内容については、ビジネス界での活用が盛んに議論されているが、大学教育の成果との関連に着目した先行研究に小方直幸（「コンピテンシーは大学教育を変えるか」高等教育研究第4集2001）の論文がある。

参考文献

日本労働研究機構1998

『日欧の大学と職業—高等教育と職業に関する12カ国比較調査結果』